

花の一期生からの雑感

昨年（二〇〇七年）は日本語日本文学科開設四十周年の年であつた。私は花の一期生であると共に、卒業後も四十年近く図書館員として働かせていただいていることもあり、実に感慨深い思いがある。

「広島女学院大学日本文学会」は学科開講三月あまりで発会し、十一月には「日本文学会会報」（現「国語国文学誌」の前誌）創刊号が発行されている。（因みに、住所は牛田町七二〇）

台風の眼（本人は「裂けた太陽」と称する）のような表紙の会報の巻頭言に、今は亡き重友毅先生と加藤惣一先生が、出発にあたっての喜びと覚悟を毅然として述べられている。

「大学とは学問を中核とする教育の場であり、その中で生まれた会であるから、責任をもって基礎づくりをし、学問を忘れてはならぬ。これは銘記すべきことである」と。

土屋 時子

学友はそれを受けてか流してか、「私達は大いに恋愛をし文学を究めそこから更に飛躍していくのだ。まず恋をしよう！恋愛が文学と一体となつて、私達の進むべき道の目標となる」となんとも大胆に明言している。四冊発行された会報に目を通すと、「エーあの友がこんな文章を書いてたんだ」と驚くことばかり。学生運動も盛んな緊張の日々―もののびのびした明るい息吹が感じられる時代だった。

私の拙文も二編載っているが、再読してみると研究報告というにはあまりに未熟である。それなのに「〇〇文学の特質は云々、作品の意義と普遍性は云々」と自信ありげにまとめている。当時はほとんど検索手段が無く、参考文献や評論も少なく、おそらく作品を読んだだけの主観で書いたに違いないと思う。赤面の至りである。

編集後記の頁には、重友毅、宍道達、加藤惣一、永尾章曹、松原勉、武久堅、相原和邦、今石元久各先生の懐かし

いお名前もあり、個性的なお顔が浮かんでくる。どんな授業だったかと聞かれても、内容はあまり語れない。でも、お一人お一人の声、そして特色ある喋り口調は今もはつきりと耳に残っている。